

自分を見つめて

ぼくが引つ込み思案に挑んだ夏

富谷・富ヶ丘 大友 謙

ぼくには好きなものがたくさんある。宮沢賢治と宇宙と音楽、中国語と粘土が好きだ。でも、五年生になって、もしかすると、ぼくはかっこ悪いのかもしれないと思うようになった。三年生のころから、授業中は、答えが分かっているのに、はずかしくて、ほとんど手を挙げることがない。ある日、ぼくはそういう自分を直したいと思った。きつかけは五月十九日、仙台青葉まつりのステージを見に行ったときのことだった。人がたくさんいて、暑くて、ぼくは疲れてしまった。ぼくはお母さんに、

「いつになったら帰るの。もう帰ろうよ。」

と言うと、お母さんは、

「分かった。伊達武将隊を見たら帰るから。」

と言った。

そして、伊達武将隊の演武が始まった。(あっ、富谷市のお祭りで見えたことがあるかな。三年生のときだったかな。)

中央に立っているのが伊達政宗、ほかにも伊達成実、片倉小十郎景綱、片倉小十郎重綱、支倉常長という武将がいて、松尾芭蕉とくノ一響

がいた。そして、政宗役の人の顔つきを見て、さつきまでのぼくの退屈な気持ちに吹き飛んだ。その人は片目を大きく見開いて、真剣な眼差しで大勢の観客を見渡していた。

「我こそは仙台藩初代藩主、伊達政宗なり。」

と、立派な声だった。演武の後、ぼくは思わず、

「かっこいい。」

と言った。すると、お母さんが言った。

「今度、仙台城に行ってみようか。かっこいいと思うなら、話してみればいいと思うよ。観光客のおもてなしをしているんだって。」

家に帰ると、お母さんがスマートフォンで伊達武将隊のラジオ番組を聞かせてくれた。リスナーは「政宗様」と呼んでいた。政宗様が話す言葉は昔の言葉で面白かった。仙台城に行くのが楽しみになってきた。

六月二日、家族で仙台城に行った。政宗様はいなかった。支倉常長まつりにいっているらしい。フードコートでお昼ご飯を食べて、帰ろうとしたとき、政宗様が歩いているのが見えた。突然、お母さんが、

「政宗様に声をかけたらどう。」

と言った。ぼくはあせった。今日は政宗様とお話をする計画ではないと思ったのに、どうしよう。急にはずかしくなって引つ込んだ。ぼくは妹に引つ張られながら政宗様に近づいた。でも、ほかの観光客が次々と政宗様に声をかけて、写真を撮っている。そこへ支倉常長様がここにことして、優しく声をかけてくれた。

「政宗様と写真を撮りたいのかな。いま、話をしている人が終わったら、ぬるっと入って話しかけるといいよ。」

と言った。妹は元気な声で、

「鷹乃杜の大友歩美です。写真を撮ってもいいですか。」

と言った。ぼくは妹の背中にかくれて、少し勇気を出して、

「大友謙です。」

と言った。すると政宗様は、

「おお、鷹乃杜か。歩美殿、謙殿、よし、一緒に撮ろうか。」

と言ってくれた。そして、政宗様と成実様と四人で写真を撮った。家に帰ったら、お母さんが写真をかべにはってくれた。ぼくはうれしかった。

六月十五日、この日も仙台城に行くと、政宗様が、ぼくたちに一冊の本を見せてくれた。それは「エイ・エイ・オー！ ぼくが足軽だった夏」という本だった。政宗様は、男の子が武将隊の一員となる話だと、あらすじを教えてくれた。ぼくは、政宗様が紹介する本なら読んでみたいなと思った。発売日は十日後くらいらしい。

六月二十八日、本屋に行くと、政宗様が話していた本がたくさん置いてあった。ぼくはどんな話だろうと、わくわくしながら本を買った。読んでみると、主人公は、小学五年生の仙田直紀という男の子で、仙台城の武将隊の足軽になるという話だった。モデルになっているのは伊達武将隊だ。直紀君は、ピアノと剣道と書道を習っていて、真

面目で、しっかりとしている。ぼくとは違うと思った。ぼくは漢字が好きで、中国語を習っているけれど、家で復習するのは面倒くさいと思ってしまう。

直紀君は、まるでぼくより年上みたいだ。そのほか、本には東日本大震災で家をなくした人、家族を亡くした人のことも書かれていた。ぼくは、震災を経験していないけれど、二〇一一年は、ぼくにあって悲しい年だ。その年の五月に、ぼくのお兄さんが早く生まれて亡くなったのだ。この本の武将隊は震災で被害にあった人のために演武をしている。直紀君も武将隊を見習って一生懸命頑張っている。ぼくは、だれかのために一生懸命やっているだろうか。いままで、一生懸命なんて考えたこともなかった。このままではいけないと思った。

ぼくは、そのことを政宗様に伝えようと思った。そこで、伊達武将隊のラジオ番組にメッセージを送った。

「ぼくは今、『エイ・エイ・オー！ぼくが足軽だった夏』を読んでいます。ぼくも夏休みに挑戦したいことがあります。仙台城で、伊達武将隊の皆さんに話しかけて、引っ込み思案な性格を直したいです。」

放送日当日、ぼくはエフエム仙台のスタジオ前に行きつて聞いた。烏帽子姿の政宗様と景綱様が、楽しそうに話していた。そして、番組終了十分前ぐらいのところで、ぼくのメッセージを読んでもらった。ぼくはうれしくて、スタジオに向かっ、手を振ると、景綱様がぼくに気がついて、政宗様に知らせてくれた。政宗様がガラス越しに、ぼく

に向かっ、こう話した。

「お主か、引っ込み思案をなおしたいのか。」

ぼくは、うんうんとうなずいた。

「無理になおさなくてもいいんじゃないか。こう見えて、わしも引っ込み思案じゃぞ。引っ込み思案には、引っ込み思案の良さがあつてな、これを言つてるとあと五分はかかる。だが、なおしたければ鍛えて進ぜよう。」

と、ぼくを見て言ってくれた。ぼくは認めてもらえて、すぐうれしかった。

夏休みになった。ぼくは伊達政宗公の伝記を読んだ。政宗公は、幼い時、天然痘で右目が見えなくなつたけれど、政宗公のお父さんはとても大事に育ててくれた。でも、お父さんは敵の人質にとられて殺されてしまった。政宗公が年をとったとき、やつと世の中が平和になつて、狩猟や能、料理を楽しんだ。そのことを、政宗公は、

「馬上少年過 世平白髪多 残軀天所赦 不樂是如何」

と、漢詩に書いている。政宗公はどんな気持ちでこの漢詩を詠んだのだろうと想像した。

（お父さん、見ていますか。平和になつて、自分は年をとつた。今、好きなことをして楽しんでいきます。）

ぼくは、何だか泣きそうになつた。ぼくは、中国語で読めるかなと思つて、中国語の先生に政宗公の漢詩を見てもらつたら、中国語としてそのまま読めるといふことだつた。ぼくは、面白くなつて、政宗公の漢詩を中国語で朗読することにした。

ぼくは仙台城に何度も行つて、伊達武将隊の皆さんに話しかけた。政宗様には引っ込み思案について聞いてみた。引っ込み思案の良さは聞き上手になれるということだつた。成実様には短い刀のことを聞いた。切腹のときに使うそう。予想もしていない使い方だつたので驚いた。景綱様には石垣について教えてもらつた。石工の印と一緒に探して楽しかった。重綱様には、前立てについて

いるお札のことを聞いた。愛宕山神社で、戦の勝利を祈願したお札なのだそう。小さなお札の中に、大きな意味があるんだなと思つた。常長様は歴史講座を開いていたので、お父さんと申し込んだ。わくわくした。芭蕉様は仙台城で飼っているメダカを見せてくれた。小さくてかわいかった。響様は政宗様のお誕生日を教えてくださいました。八月三日、四百五十七歳になるそう。ぼくはそれ聞いて、手紙を書くことにした。手紙には政宗公の漢詩を中国語で書いた。

八月一日、仙台城に行つた。お誕生日には二日ほど早いけれど、政宗様に会つたら漢詩を中国語で読んでお祝いしたいと思つていた。すると、政宗様の方から、ぼくに気がついて、

「君、手紙を書いてくれた子じゃ。読んだぞ。」と、声をかけてくれた。ぼくは、

「はい。今から政宗様の漢詩を日本語と中国語で読みます。」

と言つて、読み始めた。政宗様は、じつくりと聞いてくれた。そして、読み終えた後、

「きれいじゃな。わしも中国語で覚えるわ。」

と言ってくれた。喜んでもらえてうれしかった。それから間もなくして、伊達武将隊の十四周年記念の演武が始まった。ぼくは敷物を敷いて腰を下ろして見た。演武終了後のあいさつで、政宗様は、ぼくのことを話してくれた。

「今日な、わしが書いた漢詩を中国語で読んでくれた子がおるんじゃ。」

とほめてくれた。すると伊達武将隊の皆さんが拍手をしてくれて、ぼくは照れてしまった。

この夏休み、ぼくはすごく楽しかった。引っ込み思案をなおそうとして伊達武将隊の皆さんと話したり、政宗公の漢詩を中国語で読んで、政宗様にプレゼントしたりすることができた。引っ込み思案に挑んだことは、ぼくの一生の中で一番いい思い出になると思う。そして、「ともに前へ」という伊達武将隊の合言葉が好きになった。ぼくは将来、宇宙飛行士になりたい。学校が始まったら、ぼくも、夢に向かって「ともに前へ」進みたい。

(指導 古山 禎江)